

森林美学における巨樹・巨木の意義

巨樹・巨木の養生は樹木医学が取り組む課題の1つである。この課題に関連して「森林美学」の一端を考察したい。この科目は北大農学部で伝統的な講義の1つである。現在は、森林生態系管理学研究室とともに「森林美学及び景観生態学」という名称で3年生冬学期に配当されている。内容は一言では表現できない難解な科目という印象はあるが、私は森林施業法と理解している。巨樹・巨木が生育する森林への畏敬をもって（＝立地を吟味して）適切な森林経営を行うと、その結果、人々の心を打つ人工林が形成される。これが森林美学の示す内容であろう。我が国における実践例は、速水 勉著「美しい森をつくる」に明記されている。森林美学は我が国の森林風致計画学へも影響を与えたというが、現在は北大以外では継続されていない。

森林美学の原典は、1885年ドイツ・シレージア地方（現在ポーランド西南部の肥沃な場所）にて森林経営を行ったH. von Salisch（ザーリッシュ）の著作Forstästhetik（人工林の美学）であり、1911年に第3版まで刊行された。なお、2008年には、1902年の第2版の英訳本が刊行されるに至った。この中でアガリコブナのような形態の巨木への思いも述べられている（図1）。森林の持続的生産と利用の足跡がそこに認められる。ただ、von Salischは森林経営を行う立場からの論述であることから自然保護の考えは前面にはない。巨樹・巨木の存在意義を含めた、森林の生態系を重視した森林経営が森林美学の中で明確に位置づけられたのは、その後、1922年に発表されたAlfred Möllerの恒続林思想（Der Dauerwaldgedanke）によって完成したとされる。

von Salisch以降の森林美学の考え方も、この恒続林思想に収束されたと言える。すなわち「最も美しい森林は、また最も収穫が多い森林である」と。我が国でも1970年代になって、多層林は諸害に強く景観上も好ましい、と恒続林思想に準拠する考えが現れた。

わが国では林政学者・川瀬善太郎、明治神宮の森を設計した本多静六をはじめ造林学の本郷高德、そして国立公園の設置に尽力された田村剛、さらに、北大造林学初代教授・新島善直ら明治時代に森林資源管理を先進国ドイツに学んだ林学者によってvon Salischの森林美学が導入された。北大では1918年に新島善直・村山醸造の共著としてテキストが刊行され、1991年には覆刻された（図2）。この著作の中では、von Salischの美学とは一線を画し、天然林を含めた森林全般の「システム」について言及している。新島が、この頃すでに、北大にて森林保護学を講じていたことと関連すると考えられる。

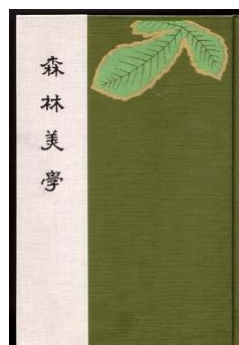


図2. 森林美学の表紙

この森林美学の中では、樹種ごとの自然樹形の美について多くのページを割き、巨樹・巨木の趣についても言及している。この内容は、その後、今田敬一を得て集大成され、「朝日の森」（2003年閉鎖；現在、滋賀県高島市「くつきの森」）設定に影響を与え、森林文化論を構築した林政学者の筒井迪夫が、現代の有るべき森林管理の指針を示したと言えよう。

さらに、2005年にはドイツ・ミュンヘンのWilhelm StölzによってWaldästhetik（自然林の美学）が刊行された。ここでは、より自然保護の信条が語られている。著者は南ドイツの森林をこよなく愛している人物である。von Salischは森林経営者でありStölzはナチュラルリストなので、視点は自ずから異なるが、このテキストでは、巨樹だけではなく老木の役割が強調され、特に老木の樹洞の役割に記述が割かれている。気象害・病虫害に加え、巨樹

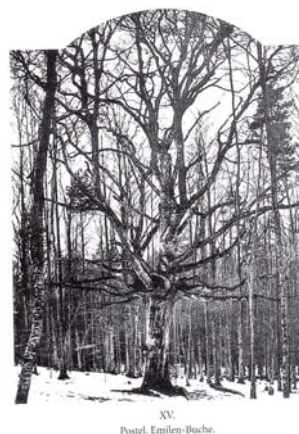


図1. シレージア・ポステル地方の巨大ブナ(通称エミリー・ブナ) 直径約145cm、樹齢約250年 (Forest Aestheticsより転写)

の樹勢とその維持管理は、北大農学部 3 年生の夏学期に担当されている森林保護学の中でも紹介し、私は西口親雄・岸 洋一らの説く「生態系保護」の視点を重視している。これらの流れの中で、樹洞の管理（営巣する鳥類などによって害虫の大発生は抑制される）やアメリカ・オレゴン州での樹洞の作成方法についても紹介している。

von Salisch の時代から Stölb に至る間に森林美学では、巨樹・巨木は美的な価値から森林の生態系の中での役割へとその捉え方が変遷した。また、我が国でもその変遷に対応して変化し、現在に至るまでに巨樹・巨木は様々な新旧の価値観が包含されている。

林野庁が取り上げた「森の巨人百選」を反映して「村・町興し」も各地で行われている。例えば、北海道・乙部町の縁桂（癒合部分を持つ老カツラ大木）を前にした「神前」結婚は人気があるが、それは、癒合部分があることと長寿木ということから縁起がよい



図 4. 熊本・一心行の大桜

峯伯耆守惟冬（みねほうきのかみこれふゆ）の菩提樹とされ、妻と息子は故郷のこの地に帰り、御霊を弔うために一心に行をおさめたことから名付けられた。（小池原図）

と考えられているからである(図 3)。

また、三大桜には選ばれていないが、熊本の「一心行大桜」の例では、春の花の時期には、年間 30 万人近い「集人力」を持ち、森林レクリエーションと地域活性化に貢献している (図 4)。厳しい自然の中を生き抜いてきた巨樹・巨木に、美しさや畏敬を見出し、それらを保全することは、また、私ども樹木医学を学び森林美学を講じる者の目標である。

樹木医学誌への発表の機会を与えられた福田健二教授（東大新領域）と貴重なコメントをいただいた清水裕子博士（長野・森林風致計画研究所）に感謝する。



図 3. 乙部町の縁桂

上部丸の部分が癒合していることから「縁」があり、長寿であることから神前結婚が行われる。HP より

参考文献

- 速水 勉 (2007) 美しい森をつくる、J-HIC、東京。
 伊藤精悟編著 (1991) 森林風致計画学、文永堂、東京
 今田敬一 (1934) 森林美学の基本問題の歴史とその批判. 北大農演研報 9 : 1-246
 Möller, A. (1922) Der Dauerwaldgedanke - Sein Sinn und Bedeutung-山畑一善訳 (1984)、新訳・恒続林思想、都市文化社、東京。
 新島善直・村山醸造 (1918) 覆刻版(1991) 森林美学、北大図書刊行会、札幌。
 西口親雄 (1989) 森林保護から生態系保護へ、思索社、東京。
 乙部町 HP (2009) www.plema.com/photo/f-otobe.html
 塩田敏志編著 (2008) 森林風景計画学、地球社、東京。
 園田圭佑 (2008) 地域資源としての巨樹・巨木の可能性—乙部町の「縁桂」を事例として—北大農学部・森林科学科・卒業研究
 Stölb, W. (2005) Waldästhetik über Forstwirtschaft, Naturschutz und die Menschenseele, Verlag Kessel, Berlin, Germany.
 筒井迪夫 (1995) 森林文化への道、朝日選書
 von Salisch, H. (1902) Forstästhetik, 2 Publisher Julius Springer, Berlin, Translated as Forest Aesthetics by W.L. Cook Jr. and D. Wehlau, (2008) The Forest History Society, Durham, NC. U.S.A.

出典：樹木医学 13:104-105 (2009) 「会員のひろば」から改作